
6年2組の日常。

白雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

6年2組の日常。

【Nコード】

N4283Y

【作者名】

白雪

【あらすじ】

社長・・・もとい、副校長の命令で意味不明な事件を解決する集団、6年2組。知られたらまずいそうなので教師の中でも知ってる人はちょっとしかないっていう微妙すぎる知名度を誇る、陰で暗躍する6年2組とその担任（+非常勤とかユカイな仲間たち）が織り成す基本コメディー時々シリアスな物語^{のはず}。

第1話 秘密結社6年2組（前書き）

白雪です。

オリジナルバージョンが友人に好評だったので、アレンジを加えてUPします。

最後まで読んでいただけたら本望です。

第1話 秘密結社6年2組

水無月教育大学附属東川小学校。

何の変哲もない小学校。そこに、6年2組は存在するのだった。

6年2組。表では、普通の生徒を演じる集団。

じゃあ、裏は？そう問われれば、淀みなく答えが出せる。

暗躍組織。

6年2組は学校生活を安全に、快適に、円滑に過ごすため、学校や地域に潜む問題を解決するべくして立ち上がった。社長（附属小の副校長先生）の命令で6年2組は陰ながら事件の解決に勤しむのである（附属小の教職員システムは、校長、副校長、主幹教諭となっている）。附属小に1年以上いる教職員は6年2組の大体の活動内容を知っている。しかし、歴代の6年生の担任と大御所しか知らない活動内容もある。校内の変革は各委員会と協力し行っている、ということとはただの教職員なら知っているが、トップシークレットであるのはやはり危険な仕事だ。爆弾処理、各所探検、事件の解決など警察よりしく小学生がやるとは到底思えないほどの仕事を迅速かつ正確にこなしていく。そのための訓練を1年生のうちから知らず知らずのうちにやらされているのだ。だが最悪命に関わるので6年2組はいつも社長に対し不平不満をこぼしている。そんな仕事を引き受けるのは報酬があるから。報酬さえあれば洪々でも完璧に仕事をこなすのである。そんな感じで6年2組は日常とは遠くかけ離れた日常を今日もいつも通り送っている。

「びゃー！」

そんな奇声を上げながら6年2組の生徒、上野麻里子が入ったのは教室。意味不明、行動不可解な6年2組でもその教室は普通。よくある学園ドラマか小学校の頃の教室をご想像いただければ、概ね間違いはない。

ただ、ストーブを除いては。

まりこは担任の机付近、普通のストーブの鍵穴に鍵を差し込む。担任の机の中から取った鍵を使って。そして巧みにボタンを押していくと、そこには桃源郷が…じゃなくて地下への階段が現れた。まりこは迷わず歩みを進めていく。そして着いたのは、地下要塞6年2組本部だった。

第1話 秘密結社6年2組（後書き）

み、短い…。

でも、まりこが登場するだけで区切りをつけようと思ってましたから…。

まりこ「読者の皆さんに謝れ〜！」

すいませんでした。次は頑張ります。

第2話 依頼と報酬

上野麻里子は地下1階を通り過ぎて、地下3階へと階段を下つていく。

下っている途中、踊り場でクラスメートとばったり出会った。

「上野、お前逃げたな？」

「何のこと？」

まりこは必死にごまかし隠し通そうとしているがすでに顔でバレバレだ。

「秋光公園付近のコンビニで強盗が出て、警察からも要請があっただろ？それでお前『ごめーん！まり用事あるんだ』とか言いながら帰っただろ」

何という見え透いた嘘なんだ、とまりこの前に立つ男子は苛立たしげに言う。

「照山が上野宅付近の監視カメラでまりこが移ってるのを発見したから間違いはないよ」

まりこの前に立つ男子もとい、照山遥輝が監視カメラ映像をまりこに見せる。監視カメラの件は言及を避けたいと思う。一応、警察から許可されているようなので。

「もうサボるんじゃない？って、いないし」

この場の雰囲気能耐え切れずまりこはそそくさと逃げて行った。

「もー、りっちゃんと照山は堅いなー。帰ったっていいじゃん！」
りっちゃんもとい、藤田梨奈と照山遥輝が堅すぎる、と不満をこぼすまりこ。サボるまりこのほうが悪い。ちなみにその日ミッション中帰ったのはまりこだけである。というか普段でも帰る人は1人もいない。そんなまりこが階段を下り到着したのは地下3階。事件を解決するためのフロアだが、普段は事件がないのでみんなここにたまつて喋ったり遊んだりしている。

「おいしい予感」

「何言ってんのまりこ、今はミッションでしょ」

まりこの意味不明な叫びや奇声を普段から聞きなれているクラスメイトは今のような言葉をものともせず受け流す。

「ミッション？」

「うん、りっちゃんと照山が上に行ったでしょ？2階に資料があるから取りに行ったの」

「何の事件？」

「ミッションっていうか、掘る作業なんだけどね。地図で指定された場所とにかく掘りまくって、何か出てきたら社長に連絡しろって言われた。何が出てくるかは分かんない」

ずいぶんとアバウトな依頼である。

「めんどくさいよ」

「今回の報酬は6年2組貸し切りのライブだとさ」

たくさん歌手が出てくるって、と言うとみんながやる気になるから不思議である。

「仕方ないな。やってやろうじゃん？」

嬉しそうな表情を出すまりこ。相変わらず嘘をつくのが下手である。

「みんなー、場所わかったよ。秋光台のここだよ」

タイミングよくりっちゃんと照山が戻ってきて、ミッションスタート体制に入る。ちなみに司令室組、現地組、保健委員会と3組に分かれている。

「じゃ、ミッションスタート！」

第2話 依頼と報酬（後書き）

コメディー？なにそれ？おいしいの？的な小説になってますね。
ホントごめんなさい。

次こそ頑張ります… たぶん。

人物紹介（前書き）

第2話の時点できてない人もいますが勘弁してください。

人物紹介

第64代6年2組主要メンバー

・上野麻里子

東川上野冷蔵の社長の娘。意味不明な言葉を叫んだり、トリッキ―なボケをかます。ニックネームは『まりこ』。

・照山遥輝

ツッコミ役で、6年2組のメカニック担当。アドリブ王兼大食い王の二冠を持つ。運営委員会所属。ニックネームは『てる』。

・藤田梨奈

6年2組の女帝。冷淡。運営委員会（生徒会的なもの）の副委員長。ニックネームは『りっちゃん』。

・千葉岳斗

ドラマーであり、エレクトーン奏者であり、天才三味線奏者。方向音痴。音楽委員会所属。ニックネームは『がくと』。

・林崎俊逸

6年2組の担任で国語教師。38歳。車は黄色いスポーツカーで、語らせると長くなる。ニックネームは『ザッキー』。

・辻深月

6年2組でも圧倒的腹黒さの女子。手先が器用で切り紙は天才。ニックネームは『みちこ』。

・真下桃帆

真下グループ総帥の孫。父は歯科医。よく家出する。オタク。ニ

ツクネームは『まつしー』。

・稲葉涼弥

東川野球少年団のキャプテン。ニックネームは『いな』。

・西河拓治

パソコンが得意で理論派。ニックネームは『たくじ』。

そのほかの人たち

・及川達夫

副校長先生。6年2組には社長と呼ばれている。

人物紹介（後書き）

意味不明な設定でごめんなさい。

第3話 爆発ファンファール

秋光台2条5丁目。水無月大附属小からそう遠くないところにこの場所は存在した。このあたり一帯は6年2組が統括しているといつても過言ではない程に支配されている。支配といえは人間きが悪いかもしれないが、町内会を半分脅してこの辺の政治権を手にしたから大げさすぎないくらいこの言葉は打ってつけなのである。そのため、監視カメラをつけ放題だったり、半額のサービスを普通に受けられたりとメリットばかり目立ってしまうが（監視カメラはメリットなのか？という質問は一切答えないよ by 6年2組全員）、町内会の催しを企画したり、財政を立て直したりするというデメリットもある。しかし、その責任を全て町内会長に押し付けている。6年2組はメリットのみ頂きに來た、ある意味山賊のような集団である。

そんなこの場所に宝が隠されていると思しき目印があった。

「これこれ！この下に埋まってるはずなんだけど」

藤田梨奈の指差した先には土が他の場所と比べ少し色が違う、という光景が広がっていた。観察力の鋭い人が見ればすぐこの異変に気付くはずであるうが、生憎ここは人通りが少なく、陰になりやすい場所なので人も近づかない。故に誰も気が付かず、6年2組関係の誰かが通報し、今に至った、ということだろう。

「じゃ、掘りまーす。3、2、1、どーん」

6年2組の数少ない理論派（数少ないと思う、たぶん）である西河拓治がドリルを遠隔操作し、りっちゃんに報告する。

ちなみに今たくじは『Retaliation』（日本語で報復）と書かれた物騒なＴシャツを着ている。こういうＴシャツは6年2組がシルクスクリーンで作っている。所謂お手製Ｔシャツだ。出来上がりは市販のものと変わらないほどの腕前である。そしてクラスＴシャツは業者に委託した。面倒くさいので。人数分用意するのが大変なので。

「はい、こちら5番カメラ、何か黒いものを発見したよー」

見た目は天使、中身は真つ黒！その名も、辻深月！がキャッチコピー（たつた今上野麻里子が考えた）の女子生徒、辻深月が右手を挙げてりっちゃんに報告する。土は白っぽいので何か発見したら、白いもの以外ははっきりと視認できるようになっている。すぐ報告できたのもそのためだろう。

「他のカメラ、見える？」

「2番カメラ見えまーす」

女装が似合うと評判の稲葉涼弥が少し気怠そうな声で言う。しかし、これはいつものことなので本当に気怠い訳ではない。逆に割と元氣である。

「7番カメラも見えたぜ」

天才音楽家、千葉岳斗も続いて言う。カメラは8個設置したらしい。

「1番カメラも見えましたー」

みちこの発見から、続いて全てのカメラが黒いものを発見した。

「というわけで、ここからは保健委員会以外全ての6年2組生徒は移送班、報告班、偽装工作班に分かれまーす。移送班は注意して運ぶように。この黒い弾状の物体が何なのか、まだわかっていません。着いたら、社長に言われた通り研究を行います。それまでは慎重に運ぶこと。次、報告班は少数で、さつさと報告を終わらせ偽装工作班と共に活動します。最後に偽装工作班は周囲の土と同じ色、成分の土を山とかからでも採ってきて、あたかも何もなかったかのようになります。幸いそこに山があるのでとってきたらいいと思います。では以上、活動に入ってください」

りっちゃんは完璧な説明でクラスメートを動かす。言われた通り、移送班は黒い弾状のものを慎重かつ丁寧に運び出した。車で運ぶと揺れて傷がつく可能性があるので、手持ちで運んでいく、地道で大変な作業だ。しかも附属小まで辿り着くまでに坂道——幸いなことに下り坂を乗り越えなければならない。下り坂は上り坂よりも体力を消費しないが、転んでしまったら一巻の終わりである。下り坂さえ乗り越えれば後は楽。そんな緊張が6年2組移送班周辺の空気を支配していた。

「ああ、来ちゃったよ、下り坂……」

思わずそんなセリフをため息とともに出してしまうみちこ。彼女のみならず、他のクラスメートたちも皆ため息を漏らし、みちこのセリフに頷いている。確かに、秋光台では最も急な下り坂、おまけにカーブがついてくるといふこの状況ではため息も出してしまうような坂である。これは誰だつてため息を出してしまうだろう。それほどまでにストレスのたまる坂だった。

「よし、行こう」

直線距離にして約500メートル、道のりは約850メートル。カブのせいで大分道のりが長くなってしまっている。そんな坂を慎重に下っていくこと10分。ようやくその緊張から解放される瞬間が来た。

「やったー！」

そう、見事に下りきったのである。ストレスから解放されて、喜びをこれまでの戦友と共に分かち合い、歓声を上げた。しかし、一点見落としがあった。下るときの姿勢、慎重さや丁寧さ、集中力、そして気合い。これらはいつもの6年2組では見られないほど目を見張るものがあつた。そう、下っているときには

何も問題はない。問題があるのは今、彼ら6年2組が行っている行為、すなわち――手を放したこと。

「あ、ヤバ」

人目のないところでその物体は爆発を起こした。

第3話 爆発ファンファール（後書き）

また笑えませんか。これではコメディーに定評のある（そんなものない）白雪の名が廃ります！

りっちゃん「頑張れ」

頑張ります。スライディング土下座。

第4話 6年2組、新兵器を手に入れる

「えーと、これは…？」

照山遥輝は目の前にあるものを指差して尋ねる。

「えーと、君たちこの前の事件で爆発物を取り扱ったじゃろ？危険を早急に知らせくれるアプリが入ってるんじゃない」

華麗にスルーしたが、前回6年2組は華麗に爆発した。もう、それは見事に。一応コメディイ小説の暗黙のルールで死者は出さない、というルールに則りピンピンしている。1日で回復する。保健委員会の適当かつ的確な処置のおかげだろう。

「いや、あのこれは一体何なんですか…」

「ふおっふおっふお、よくぞ聞いてくれた！これは我が社の渾身の力作、『ギアフォン』じゃ！」

ギアフォン。

社長（じや が語尾の人。副校長のことではない）曰く、6年2組専用の万能スマートフォンみたいなもの。スマートフォンより進化していたりしていなかったり。イヤフォンが付属でついてくる。危険物検証アプリやマーケティングアプリ、もちろん普通のスマートフォンでも使えるアプリが備わっている。電話、メールなど可能でインターネットに当然の如くつながっている…らしい。（社長談）

「6年2組専用のスマートフォンということですか？」

「まあ、ぶっちゃければそうじゃね。スマートフォン売上世界一の我が社、『TPC』にかかれればギアフォンを作ることには造作もないんじゃない！ふおっふおっふおっふおっふおっ」

TPC社の社長はかなりVIPだということが今の話で推測できる。何故知名度の低い6年2組のために専用スマートフォンをつくるのかは、社長が社長の旧い友人だから。（ややこしいので説明。TPC社の社長が、附属小副校長と友人だから、というコト）副校長のほうの社長がTPC社の社長にお願いして便利なスマートフォンを作ってもらったのである。

「はあ、ありがとうございます。TPC社はスマートフォン以外にも、作っている機器はあるのでしょうか？」

ちなみにてるは6年2組の敬語マスター、山口百花に敬語を教えてもらい、気に障ることの無い様に頑張っている。藤田梨奈はTPC社長に投資してもらって豪華なスクールライフを送りたいらしいので。

「あるぞい。パソコンは無論、最近は冷蔵庫や掃除機などの家電製品に手を出してみようかと思っているのじゃ」

この会話を聞いたりっちゃんにはやりと笑みを浮かべてこう言った。

——— よし、こいつは今から金ヅルだ。

見事にカモフラージュされた不平等条約にころっと騙された哀れなTPC社長は何の利益もなしに新製品をいち早く6年2組に設置することになってしまった。

第4話 6年2組、新兵器を手に入れる（後書き）

まりこ「短いね」

うん。短いよ。だって…無理

りー「おい」

次は頑張ります！

第5話 依頼（前書き）

短い話キター、という訳で短いですが、
でも読んでください。

第5話 依頼

「護衛？」

6年2組に護衛の依頼が来たのはほんの数分まえの出来事だった。

「そう、有名なソガ社の会長令嬢を空港からホテルまで護衛だったさ」

かの有名なソガ社が何故6年2組の存在を知っているかということ、社長の知り合いであるか、ザッキーこと林崎俊逸の知り合いであるかの二択である。二人とも顔が広く、何でそんな人と知り合いなのか、というところまで及んでいる。ザッキーに関しては、中学時代に担任を持ったことから、ちょっとアレな生徒にも「ザキさん！」とか言われて慕われている。その某生徒に仲間にも「この人がザキさんだ。」とか言われてるらしいので少し困っている。

「ザッキーの友達ね、OK」

ザッキーの友達だった。社長にも友達がいるって凄い。実際は中学時代の後輩だったとか。

「顔広すぎじゃね…？それはいいとして、いつから任務始まるの？」

「今日の午前10時から」

現在の時刻は午前9時を回っている。

「ああああ！行かないと！全員フォーメーションだ！準備しろ！」

6年2組の精鋭たちは空港に駆け出されましたさ。

第5話 依頼（後書き）

短いです、ハイ。
白雪頑張ります。

第6話 ミッションスタート（前書き）

1週間も空きました。マジすんません。

今回は新キャラ出るぞー！

第6話 ミッションスタート

富里空港。

「依頼人の名前はソガ社代表取締役の雨宮清吾。護衛する雨宮清吾の娘が雨宮氷見。もうすぐ降りてくるらしいので、氣引き締めていくぞ！」

照山遥輝の言葉に続き、6年2組護衛班はおー、と続ける。ちなみに配置は護衛班、チエックポイント空港班、チエックポイント1班、チエックポイント2班、チエックポイント3班、チエックポイントホテル班、司令班、保健委員会（委員長除く）となっている。保健委員長は護衛班につき、もしもの緊急事態の場合に備えて待機しているのである。空港からホテルは実に4キロ。チエックポイントを1キロごとに置き、万全の態勢を尽くしている。

そんな雨宮親子が宿泊するのは「王国ホテル」、かの有名な世界的有名人たち御用達の超高級ホテルである。各界の著名人、あるいは大統領や大物政治家、財閥の総帥などが集まる。雨宮家もソガ社が世界的に有名であり、使っている。6年2組も社長（附属小の副校長の事です）のコネのおかげで何回か宿泊したことがある。社長はつくづく謎のベールに包まれた存在だと思い知らされる。ホテルサービスには舌を巻いたし、料理には舌鼓を打った。とにかく舌を使いまくった、というのが6年2組的結論である。

「お、雨宮親子が手荷物を受け取ったらしい。ホントのホントに今すぐ来るから、きちんと準備しろよ、服装とか心とかな」

照山がそう言い終えた瞬間、雨宮親子らしき2人の男女が6年2組のほうに向かって歩いてきた。

「依頼人の雨宮清吾です。本日は娘をどうぞよろしくお願いいたします」

スーツにメガネと堅実な雰囲気纏った180センチメートルはあるうかという長身の男がぺこり、と頭を下げる。お辞儀からもその堅実さが伝わってくるようである。

「私は雨宮清吾の娘、雨宮氷見です。よろしくお願いいたします」

ニコツと微笑む少女は雨宮氷見、その人である。名前とは裏腹に、纏う雰囲気はとても柔らかく、長い黒髪に白いワンピースとどこからどう見ても良家のお嬢様、といった感じである。そんな雨宮氷見は微笑んだ後、スカートのすそを掴み、お辞儀をする。余談だがとても優雅な仕草で6年2組は『マジのお嬢様キター』と思ったらしい。

「よろしく願います。俺は照山遥輝です」

「私は保健委員長の大田彩織です。よろしく願います」

班長と保健委員長、そして司令長官である藤田梨奈は挨拶をするようにと社長に言われている。2人の挨拶から数秒後、照山のギアフォンから藤田梨奈の音声流れだす。

『司令長官の藤田梨奈です。今回はよろしく願います』

午前10時、護衛ミッションがスタートした。

第6話 ミッションスタート（後書き）

はい、保健委員長の登場でした。

彩織「一回この話消えて作者泣きそうになったから叫んでたよね」

だって…何百文字書いたと思ってんのさ…。

まり「がんばれ d(。(。●)」

もう頑張りました。

第7話 藤田梨奈の憂鬱（前書き）

新キャラ連発っ！

第7話 藤田梨奈の憂鬱

午前10時 ミッション『ソガ社社長令嬢雨宮氷見を無事ホテルまで護衛せよ』スタート。

えー、藤田梨奈です。司令長官として6年2組地下本部地下3階の司令室にいますのですが…。ミッションがミッションなだけになんかなり緊張してます。考えたくもないけど…もし、失敗とかなしたらヤバイじゃないですか。『責任をどうとってくれんじやいワレエ!』みたいに『や』から始まる3文字の職業の人が押し付けてきたりしないでしょうか。まあその職業の人が押し付けてきたらソガ社の失態として世間に公表しますけどね。それでも気持ちが暫くの間沈んでいくのは事実なわけで。

「はあ…」

人知れずため息もついていますよ。こんな重役ですからね。照山もおおっぺ（保健委員長大田彩織さんのことです）も緊張してると思います。ん？いや、照山は違うか。あいつアドリブ王ですしね。

「おーいりー、照山から連絡来たよ。空港から出発するところだつて」

今のは高嶋麗華、ショートカットにミニサイズの体型が特徴的なクラスメートです。オペレーターの役を任せてます。かいつまんで言えば、司令班に当たってるってことです。

「うー！りっちゃんー!」

あ、ひとつ言い忘れました。こいつは極度の私に抱き着き症です。何かあると抱き着いてきます。……あれ、女子結構みんなそうじゃない？……そういう病は蔓延しないでほしいけどとりあえずこの場では必要ないので無視しましょう。さあ、ここからが私の腕の見せ所です。

「お前はきちんと仕事しろ」

これおも大人の対応です。その辺にあつた本の角を見せながら言う、これで確実にうららかは退散します。あ、退散しました。ま、いつものことなので慣れてます。

ちなみにミツシヨンの時の司令室には保健委員会が常駐している。3人（今回の場合は2人）で居てもつまらないんだとかなんとか言つたのかは定かではないのだが、3人の熱弁に根負けした藤田梨奈は常駐することを許している。今回も無論、保健委員会メンバー2人が和気あいあいとした空間を司令室にもたらしている。

「山極スープってホントおいしいわー」

「作り方が適當っていうのが凄くない？」

山極スープ（6年2組クラスメートの山極賢太が家庭科の調理実習で生み出した奇跡の料理のこと。材料を適当に入れて作る。6年2組全員がその味に感動したとか）を飲みながらほのぼのと話してい

る2人。ミツシヨン中とは思えぬその会話に藤田梨奈はキレる。

「そこ！山極スープをほのぼのと飲まない！」

「あーりっちゃん、さては飲みたいんだな？」

保健委員安部未希がニヤニヤしながら言う。 図星である藤田梨奈は少しぐっ、と言葉を詰まらせる。

「いーよ、みちこのぶんあげようか？」

「いや、いらないわ」

藤田梨奈の即答に落ち込む辻深月。 あー、めんどくさいことしたな、と改めて思う藤田梨奈。

藤田梨奈の憂鬱は続く。

第7話 藤田梨奈の憂鬱（後書き）

あと2人。

絶対出そうって決めてる人がいるんです。
次出すんじゃないかな（予想）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4283y/>

6年2組の日常。

2011年12月2日20時52分発行